
I S インフィニット・ストラトス 漆黒の翼の二人 ~篠ノ之姓の転校生~【後編】

夕凪 渚 / 藤原 ゆきかぜ

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 漆黒の翼の一人 ～篠ノ之

姓の転校生】【後編】

【Zコード】

N7573W

【作者名】

夕凪 琉／藤原 ゆきかぜ

【あらすじ】

義理の姉、束は言いました「学園に行かないかい?」と。
そして主人公は再会する。幼い日を共に過ごした一夏と篠。千冬と共に渡ったドイツでの旧友ラウラと。（注意 ラウラは最初からオリ主にデレています。カップリングはタグで）

タイトルの通り、ラウラがメインの創作です。ちょっと崩壊気味なんでご了承をば。あと、作中で何度もドイツ語を使用しますが、自

分は全くの素人なので間違つていれば指摘をお願いします。

前編はこちら【<http://ncode.syssetu.co/m/n0033r/>】

1話 学園防衛戦 1

戦況の推移は微妙なところである。

防戦である以上、攻勢に出る必要はないのだが

『幕、出過ぎだ！』

雑音と轟音混じりの回線。

一夏の叫びと同時、紅い尾を引く幕の紅椿を追つて、白光を纏つた一夏の白式が追う。

『分かっているが

『防衛ラインを出た一夏と幕を援護しろ！ 同時に敵を近付けるな

！』

「「了解！」」

超大型ドーラ戦域征圧砲『アブソリュート・ファイア絶対砲撃』に三式弾装填 A u f n a h m e n !

強烈なマズルフラッシュがチリチリと髪を焼く。

I Sでさえも防ぎきれない反動で後退しつつ、弾を田で追つ。数秒の空白。

……敵I Sを探知して、VT信管が作動。対空砲弾の本領発揮、弾幕を形成して一瞬敵I Sの動きを止める事に成功。

『こちら一夏と幕、防衛ライン内に戻った！』

よし……。

『こちら きりしま！ 敵を海上に追い込んでくれ、トマホークで片付ける！』

トマホーク……？ 有効性はあるのか？ いや、その前に 海自がトマホークを導入したなんて話は聞いてないぞ？

『問題は後回しだ……。試してみる価値はあるだろう 名譽、一拳攻勢に出ろ！ 敵を海上に追い込むんだ！』

千冬さんの指示で、一気に学園所属の全I Sが蒼空に舞い上がる…

自然に先頭は一夏と筈。その後方に近距離戦を得意とする教師陣。中ほどには、移動した山田先生を軸とする中距離戦団。

そして 後方には自分やラウラ、セシリアを軸としての後方支援。

計31機のIDSが一挙に飛ぶとは 前代未聞のことだらう。

「セシリア 狙撃は任せた。前に出る」

『りよ、了解しましたわ!』

少しばかり高度を上げ、戦域制圧砲での曲射を始める。

接地砲撃よりも、今の状況の方が反動がマシなので 4秒1発の連続砲撃を続ける。

残敵は10に満たないが、戦果は一夏が1とシャル・筈共同で1狙撃砲撃班共同2の計4機のみ 大多数が健在……。

せめて、もう少し数を減らさなくては……。
どうするか。

「……行こうか」

ふつ と、隣に現れたラウラ。

呼ばずとも、声に出さずとも……一瞬で汲み取ってくれたのか。
「……ああ、行くか」

「最後尾でシールドを張っている2機を最低でも大破させる」「了解した

トマホークを放つても、敵のシールドを破壊しておかないと意味がない。

織斑先生、最接近して敵の防御陣を破壊します。許可を」
散発的な射撃は続いているが、大半はシールドに防がれてい

[REDACTED]

少しはたりの體がなして

『**近距離突撃銃S**を破壊してトマホーク攻撃を可能にせよ』
ショットウェルム・ゲヴェーア
商の防衛陣

『各機、攻撃始め!』

行△セ△リ△ル△ニ△

卷之三

敵の標的になるよう、あえて直線航路を選んで。
アイギス
絶対防御壁を増設エネルギーに直接繋ぐ。

たた前へ前へ

迫り来る攻撃全てを受け止め、

防がれている。
宿まる重羅。

明治三十一年

- テクニクス > -

どちらを追つてくれるか　いや、どちらに反応するか。
ラウラに反応すれば、自分に背を向ける事になる。
自分に反応すれば、ラウラに背を向ける事になる。

それはつまり、対IS戦において最強クラスの兵装を持つ2人に

は。

「『もらつた!』」

1機だけ、こちらに振り返る。

しかも、『丁寧なことにも

『貸し一つ、な』

1機をワイヤーブレードで拘束し、もう1機を慣性停止境界で完全に止めて見せた。

まあ……もつて数十秒だろうが。

「砲撃後、すぐに絶対防御壁を作動させりよー」
敵ISの背にピタリと砲口をあてがつて。

連續する4つの爆発音。

2つは、2つの砲門から対IS用徹甲弾が放たれた音。
その後の2つは、敵ISに衝突して爆ぜる音。

「ラウラ 無事か?」

『ああ……問題ない』

レーダーから2機は消えた。

「宛、きりしま。敵最後尾防衛陣の破壊を確認。攻撃のチャンスです」

『了解した トマホーク、攻撃始め!』

レーダー上、きりしまから現れた点がこちらへ向かってくる。
残った8機は今も戦域からの離脱を図っている。

セシリ亞が放つたものか 蒼い光が、一寸横を通り過ぎる。
相変わらず、寸分狂わぬピンポイントな狙撃で あれ?

敵は、避けもせず、防御もしなかつた。

エネルギー切れ?

無人機にあるまじき結果のはずだが……。

『到達5秒前、総員回避!』

千冬さんの怒号で教師陣が距離を取つていいく中。

「ラウラ
」

『ああ。こせさか氣になるな。完全計算で動くはずの無人機が
どうして』

薄い黒色をした絶対防御壁の光が一つにつながつて。

「無人機も、まだ完全じやないのか」

『それが分かつただけでも、十分な成果だろつ』

満足げに頷くラウラ。

そのまま横をトマホークが掠め。

『見届けるとするか』

「だな。トマホークの威力を見れるなんてそうそう無いだろつしな

結果を言おつ。

直撃

である。

エネルギー切れのI-Sの脆さは知つていたが、無人機には不明点
も多い。そんな無人機にもエネルギー切れがあると初めて知つた。
そして今、戦闘後の休息もないまま、再び会議室に集められた。

「諸君らに伝えなければいけない事項が2つほどある」

普段とは違う千冬さんの声色。どこか申し訳なさそうな　　そんな感じで。

それを悟ったのか、ざわざわとし出した。

「I-S学園の無期限休校と　　亡国機業の所在が判明したため……
ここが前線基地となることが、決定した」

3話 鷹月静寂

「 I.S 学園の無期限休校と 亡国機業の所在が判明したため……」
「……」
「……無期限、休校？ 亡国機業の所在判明？」
「ざわめきがより一層大きくなり。」

「説明を始める。私語を慎め」

決して大きな声ではなかつたが。

「よし。説明を始める」

千冬さんの背後のディスプレイが太平洋を中心とした画面に切り替わり。

「つい先程入った情報だ。先日大西洋で国籍不明の潜水艦が発見された。その潜水艦は大西洋から北極海回りで太平洋に出現。アリューシャン諸島の南で消息を絶つた。さらに、硫黄島周辺で発見された潜水艦と小笠原諸島沖で合流。その後……」

画面が一枚の写真に切り替わる。

「 グローバルホークが発艦中の様子を捉えた。これは間違いない」

「

全体的に細いが、片腕だけ異様に巨大な……そう、間違いない。

「ゴーレム？」

「そうだ。水中から発艦しているとみて間違いないだろう」

「そうか……」亡国機業の所在が判明しないのは、水中に存在していたからか。

しかも、北極回りで大西洋から太平洋に出れるとなると 原子力潜水艦と見て間違いないか。

「潜水艦2隻は硫黄島の西2万キロで消息を絶つた。そして……」

「そして……？」

かなりの空白が空き、千冬さんは静かに語る。

「亡国機業は……我々 I.S 学園に対し宣戦布告。先程の戦闘の直前

に受理した

なつ……ー?

「至極当然の判断だな。各國最新鋭機が運用されているこの学園を最初に潰せば、あとはずっと楽になる」

ポツリと、隣のラウラがつぶやく。

「なら、俺らが亡国機業を壊滅させねばー。」

一夏が拳を握りしめつつ、千冬さんを見据えて大きめな声で。

「そうだ。我々は防波堤にならねばならん。しかし、一般生徒を巻き込むわけにはいかないし 戦う意思のないものを戦わせようとも思っていない」

そりゃそうだ。世界を守るためとは言え、一般人を守れないようでは意味がない。

「一度生徒たちは教室に戻れ。ここからは職員会議だ」

千冬さんも つらいのか。

一夏に対して度々あつたのは違つ淫息。

9

静か……だ。

普段は騒々しいくらいの1組が、今日はどまでも静か。先頭でドアを開けた一夏も、開けてしまつたことを後悔しているかのようだ。

どうしたものかと、ラウラと顔を見合わせていると

「話があるの」

不意に立ち上がったのは、一夏曰く「クラスのしつかりもの」と評されている鷹月静寐で。

「1組全員、学園に残ると決めたの」

4話 急造IIS

1組全員の意思は固く。

「そうか……教育者としては、帰すのに越したことはないのだがな」会議室。千冬さんへの報告を終えたところである。

「これで1年は約90人か……2組5組と続いて1組も 代表候補生がいるクラスばかりではないか」

つてことは、鈴と簪が働きかけた

のかな？ 知らんけど。

「織斑先生、2つほど言いたいことが

「なんだ、言つてみる」

「歯獲コアと整備科用コア無しIISを流用し、少しでも手数を増やすべき それと、万が一に備えて防空火器の設置を」

歯獲コアは確か3つ。急造IISの件は頼三が主となつて行

きるのは悪い話じやないと思つが……。

「」こちらも手が回らなくてな。急造IISの件は頼三が主となつて行うなら許可する。しかし……防空火器の設置は私の一存では無理だ

そうですねー流石に。

「後で山田先生を向かわせる。それまで待つていろ

ああ、

急造IISの搭乗員はこちらで決めておく

たつた數十分で会議室は指令室へと様変わりし、ちらほりじつは先輩の姿も見える。

あつと……あの姿は。

「ラウラ、ちょっと待つてて

「ん？ ああ……」

「布仏先輩」

「あら篠ノ乃君。何か用？」

千冬さんに許可されて、自分が主になつて急造ISを造るのはいいが　流石に一人では無理がある。そこで、だ。この人に聞けば、あれが分かる。

「整備科の生徒は何人ほど残っていますか？」

「確かに……半分くらいが残つてるとと思つわ」

「半分か　それなら十分。」

「何？　もしかして整備科集めた方がいい？」

「そのうち、お願ひしますね。では」

さて……整備科にある「ア無し」はラファール・リヴィアイヴと打鉄が2機ずつ。

いっぽ、知り合いとかが選出されたら、専用に2機をアセンブルしてみるか？

「そうだ頼三」

「ん？　どうしたラウラ」

「先程連絡があつてな、歐州からの派遣部隊へはシュヴァルツェ・ハーゼの第2分隊第1班を割いたそうだ」

つてことは、ガーランド、ハイドリヒ、メルダース、ミルヒがここに。

「懐かしい顔が揃つたな　　ま、そう思つていられるのも最初だけかな」

「ははっ、確かにそうかも知れんな。ま、一度ゆつくりと話したいものだがな」

さて……また整備科籠りが始まるとかねえ。まあ4人が到着する時くらいは出るけどさあ。

5話 整備科集合

「では……説明を始めます」

整備室横の小会議室。

布仏先輩に頼み、ここに残っている整備科の生徒を集めてもらつた。

「現在の状況は周知のとおり。織斑先生の許可でIISを急造することが決定しました」

ザワツと。少しの私語が混ざる。

無理もないか。

整備訓練しか受けていないのに、急に製造となれば。

それより

最初に言わなくてはいけない事がある。

「そして……ここからは一部学園の機密が含まれる。機密保持が不可能と思つのならば速やかに退室願う」と言えば。

事の重大さを誰もが察知したようで、誰もがこちらを真剣な目で射る。

誰一人の退室者はいない。

「…………では、説明に入る。」ぐぐぐ簡単に言えば、訓練用コア無しIISから模造コアを抜き取り、学園で鹵獲したコアに入れ替える。その後、3名の搭乗者に合わせて細部改造を行う。質問は?」「はい!」

手を挙げたのは最後尾、布仏(妹)。

「えとー、えとねー……これの責任者は?」

「自分、篠ノ乃頼三が中心になつてこれを行つ。それが絶対条件」「ういー。了解」

布仏(姉)が布仏(妹)に何か言いたげだ。おそらく口調のことだろうか。

「それでは、作業工程についての説明に」

と、次へ移るうとしたとき。

ポケット内の携帯がブルブルと振動する。

「……小休止、5分後に再開する」

そう言い残し、会議室の外に出る。

「はい、篠ノ乃です」

「頼三か。搭乗員3名の選抜が終わった。以外にも整備員や糧食班への志願は多かつたが、IRS搭乗員への志願は意外と少なくてな……ま、すぐにそちらに向かう。では」「「はい、了解しました」さて……」

3名、か。面識ある人だと楽なんだけねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7573w/>

IS インフィニット・ストラトス 漆黒の翼の二人 ~篠ノ之姓の転校生~
2011年10月7日20時34分発行